

活動報告

慈光保育園 泥んこ遊び

6月5日、慈光保育園の園児たちが、田んぼで泥んこ遊びを行いました。
 去年の園児たちとは違い、恐る恐る田んぼに入っている様子でしたが、初めて入る田んぼに、水の温かさや、土の冷たさなど、さまざまな事を感じ取っているようでした。
 カエルやイモリを捕まえて遊んだり、アメンボを追いかけて走りまわったり、おのおのが自由に田んぼと触れ合っていました。その後は昨年同様に、宝探しと称して立神峡公園のみかん畑に実っていた甘夏を田んぼの中に放り投げ、全員で探すというゲームを行いました。
 中にはヘッドスライディングでみかんを探す子もあり、全身泥だらけになりながら、終始笑顔で楽しんでいるようでした。

今の子どもたちは、汚れる事に慣れていないように感じます。外で遊ぶ事がなくなってきた事が原因かと思います。立神峡公園では、これからも体験を通じて自然に触れあう楽しさなどを伝えていきたいと思います。



▲宝はどこだ～



▲何を捕まえたのかな？

宮原小学校・東陽小学校 田んぼの学校

12日、東陽小学校の生徒15人が田んぼの学校『苗取り』を行いました。始めに苗床から出来た苗を慎重に引き抜き「すごく」作業を行いました。根を切らぬように慎重に作業を行うことを伝え、抜いた苗をわらで束ね、田植えの準備です。わらで束ねる方法も教えたが、難しく大変苦戦しているようでした。最後は束ねた苗を田んぼに投げ入れる作業です。なるべく高く投げ、根が下を向くようにするのですが、なかなか難しかったようです。

「根をなぜ下に向くように投げるのか？」という疑問にも、講師の先生が解りやすく解説をし、生徒は「なるほど!」という表情で説明を聞いていました。

また、13日の午前中は東陽小学校、午後は宮原小学校が田植えを行いました。はかり棒と親綱引き綱を使い植えていく昔ながらの方法ですが、植え方を丁寧に教わり、田植えを実践していました。

最初は難しく、植えるテンポがずれたり、植え忘れた場所があったりなどしたため、遅くなっていましたが、慣れたら、われ先にと、印の部分に植えていました。両校とも非常に上手で、あっという間に終わってしまいましたが、子どもたちの顔には満足感と達成感を得た満面の笑みがこぼれていました。



▲上手く結べるかな？



▲腰が痛くても頑張るぞ!!



▲おいしく育ってね

お問い合わせ・お申し込み先
 立神峡公園管理組合 ☎62-1543 tategamikyuu@yahoo.co.jp (8:30~17:30 火曜定休日)

町民文芸

短歌

目覚ましに備えしベルも役立たず
 眠れぬままに囁きを聴く
 法道寺 本田 花風

目を盗みこつそり飲める酒なれば
 物音にはっと慌て咳き込む
 北野津 宮本 末秋

早朝から蘭刈りをされる梅雨空に
 心密かに心中でそつと思ふ
 高塚 桑原ゆき代

草原となりし田圃に遊ぶ鳥
 足音聞きて飛び立ちにけり
 吉本 高橋 澄子

八十才集う人吉華の荘
 つつじ菜の花迎える人も
 西野津 古崎スエノ

亡父の月命日に供えしの
 枇杷色づきて初夏の風
 南鹿野 尾崎 京子

一年もはや半分は終りたり
 心に残る事も無きまま
 吉本 橋村 正之

会釈してペタル踏む学生等の
 朝の挨拶爽やかし
 西野津 古崎 栄子

俳句

風て佳し沈黙の中の塔の寺
 法燈ゆらぎ峰青むらむ
 桜ヶ丘 宮崎敬四郎

戦争の怖さを知らぬ人々の
 その言の葉に怖さを覚ゆ
 西上宮 村内 一誠

わが胸に迷い堂のネックライト
 北野津 宮本 末秋

暮れなづむ梅雨空に鳥苗荒らす
 高塚 桑原ゆき代

バス停の道辺に黄色き夏の花
 吉本 高橋 澄子

パズル絵のごとし植え田に山映る
 西野津 古崎スエノ

夏告げる茗荷竹の葉の茂り
 南鹿野 尾崎 京子

待合室雑誌めくりて時刻む
 西野津 古崎 栄子

梅雨の部屋どこ歩いても湿りたる
 町 香山菊童子

子猫抱き我慰めること多し
 町 香山セツ子

炎天を抜けて流離の人となる
 桜ヶ丘 宮崎敬四郎

白粉の花に遊びし遠き日よ
 桜ヶ丘 吉田 照子

替え歌シリーズ

悲しい酒

吉本 橋村 正之

ひとり墓場にたたずめば
 なぜか背筋が寒くなる
 いくら人目を忍ぶとて
 なんて此処なのなんてなの
 思うばかりで此のわたし
 好きなあなたに逆らえず
 やぶ蚊うちわで追いつながら
 待つて居るのも恋ゆえよ
 ひとの気持ちも知らないで
 やつと姿を見せた人
 広いその胸顔うずめ
 わたし泣きます怖かった

現代短歌

法道寺 本田 花風

”中三の秋がゆつくり深まって無口
 なる人の魅力に気付く”朝日新聞の歌
 壇は四人の選者がそれぞれ十首選考
 するが、四人すべてが取り上げたの
 は知る限りでは初めてである。

すぐ目に留まって、全体を見回すと、
 そうであった。古典的短歌にもそれ
 なりの味わいがあるが、現代短歌の
 ストレートに心を揺さぶる表現力と
 感情の深淵さにいつも泣かされる。
 歳ゆきても青春を追い求める心意気
 は残りが、活字が追い付いてくれ
 ない。「臆することなく 見極め
 怠ることなかれ」と若き日にしたた
 め職場の壁に掲示した色紙のような
 気力は今はもうキーボードの気分次
 第。救いは”字余りOK”とテレビ
 で俳句や短歌の番組の指導の先生が
 言ってくれた。要は狭いスペースに
 どれだけの思いを詰め込み切れるか
 がキーポイントである。

投稿いただきます作品は、短歌・俳句それぞれ一句とします。必要な場合は、ルビを付けてください。
 また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いします。